九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『抽象と直観』を哲学研究として読む : 認識と存在の形而上学再訪

永嶋, 哲也
福岡歯科大学 : 教授

https://doi.org/10.15017/7159237

出版情報：哲学論文集. 59, pp.45-59, 2023-09-30. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン：
権利関係：

『抽象と直観』を哲学研究として読む

――認識と存在の形而上学再訪

永嶋哲也

はじめに　本稿の目的

本稿が目的とするのは、稲垣良典氏による『抽象と直観』[1]を中世末期の思想を論じる哲学史の研究としてではなく、認識や存在の問題に対する哲学上の応答として読み解くことによって、『抽象と直観』において扱われている哲学的問いを明らかにすることである。

すなわち本稿は九州大学哲学会の令和4年大会（2022年9月24日）シンポジウムで発表された提題内容を報告するものであるが、そのシンポジウムの趣旨は、同年1月15日にご逝去された稲垣氏の多岐にわたる学問的功績を思い起こし追悼しようというものであった。提題者に提題内容を構想する上で課されたテーマが「稲垣先生から学んだこと」であったのであるが、先生のもとで長く学ばせていただいた者として「学んだこと」を振り返る[2]に、そこで気づかされたのはむしろ「学んでいないこと」が非常に多くあることであった。多岐にわたる研究業績のなかで読んでいない著書論文の方が読んだもの

よりも遥かに多く、読んだことのあるものも多くは理解が不十分なままであることに改めて思い至った。不肖ではあっても曲がりなりにも教えの列の末席にある者として、主著の一冊に挙げられるであろう『抽象と直観』を改めて取り上げ、検討内容を報告することで提題の任を果たそうと考えた。

『抽象と直観』を再訪し検討する中で改めて得られたのは、『抽象と直観』の内容が難解であるという実感である。本書ではことさらに難解な言葉づかいや深遠ぶった語り口が用いられているわけではなく、また大仰な比喩表現も奇を衒った展開も行われていない。紛れもなく「平易な」語り口で書かれていると言えよう。そういう語り口のゆえなのか、書かれている内容についても「難解」と表現されるのはあまり目にしなかったと記憶している。しかし実際は、平易ではないどころか非常に難解な内容になっていると思う。[3] 真に哲学的な問題は謎めいて深遠ぶった語り口などすべて削ぎ落としてもなお真意を捉え応答することを許さない難しさを持つ。平易な論述の中にある理解困難ないわば特異点に本書の解釈における要衝として注目し、著者による哲学的応答の試みにわれわれも参加すること[4]を本稿は目指している。

1. 難解さを覆い隠しているもの

『抽象と直観』の構成は、I部・序論の第1〜3章とII部・本論の第4〜11章からなる。そしてその本体部分となる11の章の後に「結語」があるのだが、その結語部分に次のような一節がある。

> これまで行ってきた考察は、十四世紀前半オッカムによって成就された認識理論における転回ないし革新が、近代哲学の認識理論を今日にいたるまで基本的に方向づけるほどの根本的なものであることを示そうとする試みであった。(p.339)

この一文は第1章で論じられていることの要約になっていると言ってよい。すなわち第1章では、カント、アリトストテレス、トマス、スコトゥス、オッカム、スアレスの認識理論を順に取り上げ、トマスがアリストテレスから継承した認識の形而上学、自己認識を前提とする魂論に裏打ちされた認識理論が、オッカムによって打ち壊され、そのときに代わりに据えられた認識理論の前提が近代を経て現代にまで綿々と受け継がれている、と論じてある。

第1章で書かれている内容を正確に読み取るのは容易ではないのだが、俯瞰的に眺めればわかりやすい図式を描くことができる。つまりアリストテレス、トマス、スコトゥスの抽象理論、霊魂論、認識の形而上学とオッカム、スアレス、カントの直感的認識理論、知的霊魂論の否定、個体主義との間に断絶があるということを描くただそれだけの図式である。それだけを読み取った読者は「『抽象と直観』に書いてあることは理解した」と誤解し、「この先の章は読まなくてよさそうだ」と判断して、いっきに巻末の「結語」に飛んで上記一文を目にし、その理解は正しかったと誤解を深めたのではないだろうか。そのような誤解に基づくと、『抽象と直観』の2〜11章は「認識理論はオッカムによって変革された」ということを示すために延々と繰り広げられているテキスト上の論証作業だということになってしまい、当然「もう読まなくていい」という判断につながってしまう。だがもちろん、そのような受け取り方は誤りであって、そのように単純なことしか書かれてない研究書では当然ない。

2.『抽象と直観』の構成

『抽象と直観』は一冊の研究書であるが、再録の学術論文を多く収めた論文集という側面も持っている。もちろん書籍化の際に新たに書き下ろされた章もあるが、少なくとも再録された章は、それが発表されたときは一つの研究論文として書かれたものであり、個々独立の論考であった。ところが、各章の見出しを記した下記表1を参照いただきたい（これから行う議

論を踏まえた情報も書き込まれているが、現時点では無視いただきたい）。この著作の構成を確認すると、ある意図をもって精巧に組み立てられた構築物になっていることがわかる。あたかもはじめから一冊の本にするよう意図して書かれたかのように、である。そのため、多くの人が読み飛ばしてしまったのではないかと述べた2～11章の議論をただしく受け止めるためには各章の丁寧な検討が必要となる。だがしかしそれを許すだけの紙面の余裕はない。どこかの章の議論に注力し検討する必要があるだろう。

再度、表1を参照いただきたい。最左の列に記されているのは、「あとがき」（p.343）にある初出一覧をもとに新しい順にふりなおした番号で、「新」とあるのは書籍として編むに際して「あらたに執筆」された章を意味する。つまり「新」と記された1、8、11章がもっとも新しく（１９８９年後半）、それに次ぐのは3章の１９８９年（昭和64年）ということになる。それに対してもっとも古いのは9章の１９８０年（昭和55年）で、『抽象と直観』の１９９０年2月から10年も遡ることになる。そのことを踏まえて「まえがき」の位置付けを確認したいのだが、「まえがき」は11の章を構成するすべての論考が揃った上で、どう配置するか考えた上で書かれたものだと思われる。いうまでもなく、今まさに研究書を一冊、書きはじめようというときに書かれたものではない。それゆえ「まえがき」に『抽象と直観』の中心テーマとして「オッカムによって遂行された認識理論における根本的な転回ないし革新である」（p.iii）と書かれてあるのだが、これは文字通りに受け取るべきではなかろう。この一文が意味しているのはむしろ、著者が〈少なくとも達成できた〉と自認している内容だと、つまりきわめて禁欲的な成果表明だと受け取るべきである。さらに言えば、これは単に通過点であり、真の目標はもっと先にあると受け取ることができる。

「まえがき」では続く箇所（pp.iii-v）に、各章が担う役割が説明されている。各章の要約ともいうべき箇所をさらに要約して各章の内容を確認していけば…

1章　霊魂論の崩壊と認識理論の変容
　#認識理論の根本的変容を、形而上学的な霊魂論の崩壊過程にてらして述べる
2章　トマスの霊魂論――自己認識の問題
3章　「オッカムの剃刀」――中世後期の精神的風土
　#1章の補足

各章の見出しと、その下に「#」の印を付けて内容についてのコメントもしくは内容を付した。第1章の議論は上ですでに確認したとおりであるし、その補足と位置付けられた2、3章もここでは章タイトルを確認すれば十分であるとしたい。

続く4章と5章においては、オッカムが直観的認識を基盤とする認識理論を打ち出すに際して、トマスの可知的スペキエス理論を否定することで、抽象を基盤とする認識理論を否定できたのだ、と論じている。

4章　認識におけるスペキエスの役割について
　#トマスの〈可知的スペキエス〉認識理論の考察
5章　観念、スペキエス、ハビトゥス
　#トーマス・リードによる　精神のうちなる観念の否定
　#オッカムによる　可知的スペキエスの排除　　両者のパラレリズム

そしてオッカム以降の時代に生きる我々にとって、オッカムが対峙したトマスの「可知的スペキエス理論」は terra incognita「未知の国」になりはててしまったと「まえがき」で語られている（p.ii）。つまり著者にとって真に目指している到達目標は、

incognita を cognita に戻すこと、オッカムによってわれわれに着けられたくびきを排して、「可知的スペキエス理論」を詳かにすることだったはずである。

例えばわれわれが取り外しのできない色眼鏡を装着していたとして、色眼鏡なしの視覚状況を知ろうとすれば、色眼鏡の特性を調べるしか手はない。オッカム以降に生きるわれわれはオッカム理論の特性を調べねばならない。6、7、8章はオッカムによるスペキエス批判を調べ、トマスからオッカムへ認識理論がどのように変わったかが論じられる。

6章　抽象と直観

#オッカムが抽象を斥け、直観的認識で認識理論を説明するに至った背景

##オッカムはどのように〈スペキエス〉を誤解したか

7章　オッカムにおける直観的認識の問題

#直観的認識を理解するための予備的考察

##「どのようにして」個体認識が生じるか説明されない

8章　学知の対象について

#scientia 理論についてオッカムとトマスとを比較

##両者は scientia を habitus と捉えるが habitus 理解が異なる

このように認識理論が変容したことを丁寧に議論することで、incognita の地にあるトマス認識論をできるだけ明らかにしようとしたと言うことができる。

最後のブロックである9、10、11章だが、オッカムの直感的認識の対象である個体について論じられている。

9章　個体における存在と本質
　##オッカムの個体主義　「一」について2つのレヴェルを無視
　#数の原理としての一　ensと置き換え可能な一
10章　「もの」と「記号」――オッカムの個体主義についての一考察
　##「もの」と「記号」の根本的分離　オッカム個体論の根本前提
　#記号＝普遍ともの＝個物が合一する場面を捨象
11章　普遍と個体――個体化の原理について
　##オッカムの個体主義はスコトゥスの個体化理論によって準備された
　#トマス・スコトゥス・オッカムの個体認識と個体化原理

すなわち、オッカムの個体主義を考察することは、彼の認識理論を理解するために不可欠であるから、トマスとオッカムさらにはスコトゥスも比較対象に加え、検討がなされている。

以上のような内容をふまえ、書籍全体の構成をまとめたものが、先ほどから参照している表1である。

表1

初出順	章	見出し	内容
新	1章	霊魂論の崩壊と認識理論の変容	序論
4	2章	トマスの霊魂論――自己認識の問題	
1	3章	「オッカムの剃刀」――中世後期の精神的風土	
7	4章	認識におけるスペキエスの役割について	スペキエス
6	5章	観念、スペキエス、ハビトゥス	
2	6章	抽象と直観	直観的認識
5	7章	オッカムにおける直観的認識の問題	
新	8章	学知の対象について	
8	9章	個体における存在と本質	個体論
3	10章	「もの」と「記号」――オッカムの個体主義についての一考察	
新	11章	普遍と個体――個体化の原理について	

このように全体の構成を見ることによって、『抽象と直観』がある意図を以って精緻に、つまりそのときすでにあるパーツを並べさらに足りないところを書き下ろし、構築されているということを再確認することができる。確かにそこで示されているのは、既に「まえがき」で記されていた通り、認識に関してわれわれがもっている前提がオッカムにまで遡るということである。しかし、それは言わば通過点で、この『抽象と直観』という研究がそもそも目指している真の目標地点は、オッカムが作った断絶のその先にある、terra incognita と化したトマスの形而上学である。

3．認識の理論　可知的スペキエスを介する知性による認識

3．1．スペキエスをめぐる素朴な誤解

この書籍が言わば構築物のように組み上げられた構造をしているというのは繰り返し述べてきたことであり、さらにこういう構築物において一部だけ取り出し論じるのは本来きわめて不適切な解釈方法だと承知しているが、紙面の制約もあるので第4章の議論に注力したい。本書の中心、要となる章は、一見、書籍タイトルと同じ見出しを与えられた第6章と考える向きもあるかと思うが、直前に述べたオッカムの作った断絶を乗り越えトマスの形而上学にまで到達するという目的に照らせば、可知的スペキエスについて論じた第4章「認識におけるスペキエスの役割について」（pp.103-125）を主に取り上げ考察すべきと考えるからである。

第4章で述べられる可知的スペキエスについての理解を容易にするために、「スペキエスをめぐる素朴な誤解」（p.129）と稲垣氏が表現しているものを、あえてまず取り上げたい。つまり「デモクリトス流のエイドーラ流出論」（p.133）である。トーマス・リードが批判した「精神のうちなる観念」にしても、オッカムの批判したスペキエスにしても、それら批判者にとってスペキエスがエイドーラ説に近い形で理解されていたと論じられている。ではそのエイドーラ説とはどのような考え

方であったのか？

「素朴な誤解」に相応しく、厳密ではないが分かりやすいモデルで考えてみよう。原子論者が視覚を説明する際、感覚されるところの事物の表面から、薄い層が四方に放出され、感覚する者に入って感覚表象という視覚を起こすと彼らは言う。エピクロスは『ヘロドトス宛の手紙』のなかでこう表現している。

なぜなら物体の表面からたえず粒子が流れ出ているからである。ただし他の粒子がすぐそのあとにとってかわるので、物体の減少は観察されない。そして放出された粒子は、それらが固体の部分を構成していたとき原子がもっていた位置と配列を長い間保持する。‥‥また私たちが物体の形を見ることができるのは、その物体から何かが出て眼にはいってくるからだと考えざるをえない。なぜなら、外部の物体がそれの色や形という性質を私たちに印象づけるのは、物体と私たちの間にある空気を媒介としてでなく、また私たちから出て物体にいたる何かの線または流れによるのでもなくて、むしろ物体自体からくるある薄層――適当な大きさの――が私たちの眼または心の中にはいることによるのだからである。これらの薄層あるいは輪郭は、物体そのものと同じ色と形をもっている。[5]

この薄い層、すなわちエイドーラをルクレティウスは「蛇の脱皮」「蝉の抜け殻」と表現した。[6] スペキエスの批判者たちはこの視覚・感覚モデルをそのまま知性に持って行った仕方でスペキエスを理解し、誤りに陥ったと『抽象と直観』の中で繰り返し論じられていて、それは十分説得的だと言っていいだろう。しかし、このようなモデルはとてもイメージしやすい図式的説明なので、注意していないと可知的スペキエスの説明をこの図式的な説明に寄せて誤解してしまう危険性は常にある。

オッカムもまた可知的スペキエスを批判し、不要だと〈オッカムのカミソリ〉で切り捨てたが、本書においてそれが誤りであったと批判されている。つまり稲垣氏は、知性認識を説明するためにスペキエスは必要だと考えているわけである。そ

のスペキエスについてどういう仕方で認識に関わっているどういうものか、本書での主張を追ってみたい。

3．2．可知的スペキエスと認識の形而上学

可知的スペキエスとは、認識される事物と認識する者との間にあって「それによって、それに即して、それを通じて認識する」（p.105）ところの「認識されるところのものの類似」（p.105）、「対象の本性あるいは何性に関する再現・表示」（p.106）であるが、「認識対象によって直接的に認識主体の上に刻印づけられた類似ではない」（p.107）、そして「認識されるところの事物の形相と同一」（p.107）である、と説明される。

言い換えれば、スペキエスとは、それによって（quo/qua）、それに即して（secundum quam）、それを通じて（per）知性が認識するものである（p.105）。認識対象の類似（similitudo）で、それを通じて認識されるとか説明がある（p.105）ので、〈エイドーラ〉モデルで誤解されたのも故なしではないが、だが認識対象から受動的に受け取る（刻印づけられる）ようなものではなく、むしろ認識対象がもつ形相（forma）と同一（idem）とある（p.107）。さらに、ここで「同一」と言う際の「一つ」はものを数え上げる際の最初（最小の自然数）という意味での一ではなく、形而上学的な一だと説明されている（p.117）、つまり9章「個体における存在と本質」で扱われているような意味での一である。

ここで確認しておかなければならない。認識、知性認識とは何性 quidditas の把握、ものの「何であるか」を認識すること（p.105）であり、単に感覚的な把捉（視覚ならば色や形）とは異なる。その知性認識の際に起こる抽象とは、個別的認識対象に関わる〈感覚表象〉から本性・何性に関わる〈可知的スペキエス〉への移行のことである（p.106）。

そのように解すれば、スペキエスは、飛んでくるセミの抜け殻（対象物の模写）のようなものではないとわかる。本書では、むしろ例えるなら光だと説明される（p.113）。つまり光がなく真っ暗ならば目の前に対象があっても見えないが、それを見えるようにするのが光であるのと同様の仕方で、対象に対する知性認識を可能するようにするのがスペキエスであると

説明される。すなわちスペキエスとは、もっぱら能動因たる知性がそれによって作用を営むところの形相であり（p.109）、知性がそれによって現実に認識作用を行いうる形相としての役割を果たす（p.111）と。

可知的スペキエスの役割としては、二通りあると紹介されている。一つは認識の形相的確定であり、事物がいかなるものとして認識されるかを確定する（p.114）。もう一つは認識作用の能動的根源としての役割であり、認識するという行為がスペキエスによって成立するという仕方で介在する（p.114）。この二つの役割は、「スペキエスは認識作用にたいして形相的確定（specificatio）を与えることによって認識を成立させる」（p.114）とされるので、別々の役割ではなくて一つの事柄を別の側面から記述しているようなものとして理解するべきであろう。そして、前者はさきほど「認識されるところの事物の形相と同一」と表現されたことを意味し、後者は「一種の光にたとえるべき」と述べられた点を表していると解し得る。

そして前者の「認識の形相的確定」に関しては、精神のうちにあるスペキエスと、質料のうちにあるスペキエスは「同一」である（p.116）と表現される。知性はあらゆるものになる、すなわち認識対象の形相を受け取り、ある特殊な意味で認識対象と同一になることが認識だと前提されるが、これを可能にするのがスペキエスだと理解すべきであろう。そしてこの前提に関して、このことを承認することなしには「私はまさしくこの物、この人間――なんらかの観念や印象ではなく――を認識している」というわれわれの認識経験を理論的に基礎づけることはできないと述べられている（p.116）。つまりトマスは、真っ青な空を眺めながら「わたしが認識しているのは青空ではなくて青空の知覚像ではないないだろうか?」などという疑いをもたない、持つ必要がないということである。わたしが認識で捉えた青空の形相と青空自体の形相は同一であるとスペキエスの介在によって保証されるからである。このように言う稲垣氏は、オッカムだけなく近代以降の哲学を敵に回して「認識とはこのようなところまで踏み込んで論じなければ十全な哲学的説明がなされたとは言えない」と主張しているのである。

さらに「認識の形相的確定」に関して言えば、スペキエスを受けとるとは、知性が事物の本性そのものによって「動かされる」こと、そのことを意味する（p.136）、認識行為を行為として成立させる原理としての形相は対象たる事物の本性その

ものである（p.139）と説明される。そしてこのような説明は、知性と事物との合一という認識成立の根拠を形而上学的言語で表現したものである（p.139）と述べられる。以上のように可知的スペキエスとは純粋に形而上学的な存在者であり、図式的に「要するにスペキエスとは」という仕方で安易に説明されることを事柄自体が拒んでいる。

稲垣氏は、直観的認識に基づくスコトゥス・オッカムの認識理論を「事実についての単に経験的・記述的な言語」で「認識行為そのものの可能性もしくは本質に何ら触れるものではない」（p.146）と批判している。認識の可能性つまりなぜ知性による認識が可能であるのかを説明できないので、オッカム以降の認識理論は哲学的に不十分である、と。つまり形而上学的な説明にまで踏み込んで初めて認識に関する十全な哲学理論となりうると主張している。すなわち認識について哲学として応答するためには形而上学にまで踏み込み可知的スペキエスまで論じなければならないと表明しているのである。

4．自己認識と存在の問題

すでに十分、議論が難解になってしまったが、「認識の形而上学」についてもう少し説明を付け加える必要があるだろう。認識の理論における存在 esse という形相の扱いについて取り上げる必要がある。

『抽象と直観』第4章の途中で神の自己認識が論じられている。神は自己認識を通じてすべての被造物を認識するが、神ならぬ人間は自己認識では外界の事物についてほとんど認識できないので、認識するためにはスペキエスを要する、という議論である（pp.118-110）。

前節において述べた可知的スペキエスの2つ目の役割である「認識作用の能動的根源」に関して、つまり認識するという行為がスペキエスによって成立するということに関して、esse による現実化・活性化が必要であると説明される。すなわちスペキエスの形相的確定という働きに関してはスペキエスが自前で果たすことができるけれども、能動的根源という役割に

ついては、「より高次の現実態 actus によって現実化ないし活性化されてなければならない」（p.114）と述べられている。この「より高次の現実態」というのが「存在（esse）」である。

すなわち「存在による形相の現実化」とも表現すべきこの考え方は、知性認識（intelligere）の根元には存在（esse）がなければならないという洞察である。神の認識においては知性認識することと存在することは同一の事態としてあるが、もちろん神ならぬ人間においては同一ではない（p.114）。しかしそのような人間的認識においても、「認識する」という行為（＝現実態）の直接的で主要的な根源は「存在する」という現実態であるという洞察が述べられる（p.114）。

この存在による形相の現実化に関して、こう説明される。同一のスペキエスないし形相が自然的存在（esse naturale）によって現実化されているかぎりにおいては自然的スペキエスと呼ばれ、志向的存在（esse intentionale）によって現実化されているかぎりにおいては可知的スペキエスと呼ばれる（p.117）と。『抽象と直観』で論じられるトマスの認識論は正真正銘、純粋な形而上学的理論であり、質料・形相や可能態・現実態という枠組みを駆使して展開されている。

結語に代えて

刊行から7年後の1997年に中世哲学会で『抽象と直観』の書評会が行われた。その際、筆者コメントで稲垣氏は「『存在』の形而上学の構築を目指すべき」だが「仕事は一向に進んでいない」と認めた上でこう述べている。

> 認識の形而上学については、たんに「形而上学的な認識理論」にとどまるのではなく、知性認識へのふりかえりを徹底させることを通じて「存在」の形而上学の構築をめざすべきである、と考えており、『抽象と直観』の続編としてぜひまとまった形で公けにしたいと願っている。[7]

ところで稲垣氏をご存知の方ならほとんどの方に同意いただけると思うのだが、氏は実に責任感の強い方であった。責務を果たすということに忠実で、実際さまざまな責務を見事なまでに果たされてきた。そして九州大学に奉職されていた時には哲学科、哲学・哲学史の第一講座教授として「哲学を論じるべき」という努めを自らに課されていたのではないかと思う。そして本書はそのような哲学的営みの集大成、控えめに表現しても集大成の一角をなすものである。

九州大学の定年退職は１９９２年３月であったが、それがもしあと10年先であったなら、つまり自らに哲学を論じることを課する期間が『抽象と直観』後にあと10年あったなら、『抽象と直観』の続編が存在の形而上学を論じた研究書[8]として出ていたかもしれない。いずれにせよ、形相を現実態へもたらすesseについてさらに詳らかにするというのは正直なところ、このわたしの手に余る難題である。それどころか、ここで行った考察が『抽象と直観』の解釈として適切かどうかという点すらもおぼつかない。むしろ読者諸氏におかれてはここでの解釈をいぶかしみ、確認のために『抽象と直観』を再読いただければ幸いである。

註

（1）稲垣良典『抽象と直観 中世後期認識理論の研究』創文社、１９９０年３月。

（2）中世哲学会による稲垣先生追悼の一環として略歴と研究業績リストの作成という機会もあったことも記しておきたい。『中世思想研究』64号、中世哲学会、２０２２年９月、pp.17-25。

（3）その学術的重要性に比してこの研究書の書評はあまり多くないように思う。その少ない書評の中でも水田英実氏の手によるものは正確な読解に基づく論考である。しかしそれゆえに難解な内容となっている。『中世思想研究』32号、中世哲学会、１９９０年９月、pp.181-185。

（4）学術大会当日は、本提題の limitation として次の3点を明示してから本題へと入ったことを付記しておきたい。(1) 提題者の専門

は12世紀であり、13世紀以降は門外漢であること。(2) 提題者は門下生のなかでもnovissimus（最年少の、もっとも出来の悪い）であることを自認していること。(3)『抽象と直観』を正しく解釈することは、著者の思想（著作群）全体のなかで位置付けてこそ可能になることを理解した上であえて本書のみを取り上げ解釈していること。そのようなlimitationがあるなかでもあえてこのような提題を行った意図は、「こうではないか？」という先生の問いかけに応答を試みるのが先生を追悼することで、シンポジウム参加の皆さま・本稿の読者の皆さまにもその応答に参加いただくことが先生への追悼になると考えたからである。

（5）市場泰男『夢か科学か妄説か　古代中世の自然観』平凡社、１９８７年７月、p.87；エピクロス『教説と手紙』岩波書店、１９５９年４月、pp.16-18。

（6）ルクレティウス『事物の本性について』岩波書店、１９６１年８月、p.161。

（7）『中世思想研究』40号、中世哲学会、１９９８年９月、p.168。

（8）２０１３年に『トマス・アクィナス「存在（エッセ）」の形而上学』と題する研究書が刊行されている。ただし現時点でこの著書について『抽象と直観』との関連で十分に検討する準備がわたしにはない。稲垣良典『トマス・アクィナス「存在（エッセ）」の形而上学』春秋社、２０１３年12月。

（福岡歯科大学・教授）